

藤子不二雄を読んで育った創作者たちについて

理学研究科 修士 1 回生 前田悠陽

藤子不二雄両先生 (藤子・F・不二雄, 藤子不二雄[Ⓐ]) による, 日本の漫画界への類まれなる貢献については, 改めて語る必要もないと思います. そして, 漫画家 藤子不二雄の登場から半世紀以上が過ぎ, 現代では, 藤子不二雄の漫画を読んで育った世代が, クリエイターとして日本中で活躍しています. このことを踏まえて, 本稿で私は次のような試みについて提案します. それは,

藤子不二雄先生に影響を受けたクリエイターの作品から, 藤子不二雄先生を捉え直す

ということです. この試みに, どの程度の意義があるのかは未知数ですが, ひょっとすると, 何か面白い視座が見えてくるかもしれません. その余地がある限り, 私は喜んでこの試みに身を投じるつもりです.

現代の漫画には, ドラえもんがモチーフとなった描写が今でもよく見られます. 例えば何か道具を出すときに, その手をドラえもんの手にして効果音を付けることはその典型です. また, ドラえもんのキャラクター設定をオマージュした作品も多く存在します. 有名なものに, 『デッドデッドデーモンズデデデデストラクション』(浅野いにお)の巻頭漫画「いそべやん」や, 『僕とロボコ』(宮崎周平)があります. 私たちは, このような作品を見たときに, すぐに, それがドラえもんのオマージュであることに気付くことができるのです.

上に挙げたように, explicit に藤子不二雄作品をオマージュした作品でなくても, 作中で藤子不二雄作品への言及があったり, 藤子不二雄両先生に関連する描写があったり, そのエッセンスを見つけることは珍しくありません. こうした作品を読み解くことで, 何か見えてくることもあるかもしれません.

本稿では, 藤子不二雄作品, あるいは藤子不二雄先生本人を取り扱った作品を, 特に 3 作品選んで紹介します.

小説版ドラえもん『のび太と鉄人兵団』

本作は, 2011 年のドラえもん映画『新・のび太と鉄人兵団』公開時に, このリメイクでなく原作の『鉄人兵団』をノベライズしたものです. 作者は瀬名秀明さんです.

原作のノベライズ自体が異色の企画ですが, 大筋は原作の展開をなぞりつつ, さらに大きく物語が追加されています. 特筆すべきは, 「大長編において冒険に出たのび太たちが不在の間, 町は大騒ぎになるのではないか」という問題を正面から描いていることです.

大長編ドラえもんの常套手段として, 「冒険に出たすぐ後の時間にタイムマシンで戻れば問題ない」というものがあります. 大長編第 1 作の『のび太の恐竜』でも, のび太たちは白亜紀の世界で何日間にもわたる大冒険をし, 最後には出発した当日にタイムマシンで戻ってきます. その後の大長編や短編においても, 「タイムマシンで元の時間に戻る」という解決手段が, 一切のデメリットがない方法として素朴に使われ続けています.

しかし, 本作ではこの「タイムマシンによってなかったことにされた世界」を, ある種悲劇的に描いたこと, また最終的にのび太たちはタイムマシンを使わないという選択肢を取ることに特殊性があります.

のび太たちが鏡面世界で地球の存亡をかけた戦いに身を投じているとき, 元の世界では, 小学生 4 人 (と, 野比さんとこのへんなロボット) の集団失踪事件に発展しているのです. タイムマシンを使えば, 確かにこの大事件ははじめからなかったことになるけれど, 本当に「なかったことになるのか?」という問いを, 瀬名さん

は提示しています。この、タイムマシンによってなかったことにされた世界についての考察と、原作の『鉄人兵団』でも核となるテーマである、ロボットと人間の在り方に対する描写は、SF作家である瀬名さんの真骨頂と言えるでしょう。

本作は、『ドラえもん』では珍しく、鏡面世界と元の世界で同時進行的に人々が動いてゆく、一種の群像劇的な側面を持っています。のび太たちが世界を守るため立ち上がるのと同じとき、のび太たち不在の町でひそかに起きていた事件と、その対応に奔走するとある人物……藤子不二雄ファンにはうれしいサービスも含まれています。

藤子・F・不二雄先生がドラえもんで描いてきた、ロボットの心をどう捉えるか？という問題に対して、瀬名さんがどのように切り込んだのか……最近、辻村深月さんの『のび太の月面探査記』と同時に文庫化されたので、ぜひ読んでいただきたい作品です。そして次に紹介するのは、その辻村さんの作品です。

凍りのくじら

藤子・F・不二雄先生を敬愛する父が失踪して……という物語です。本作については語りたことが多くあるのですが、まだ私の中で本作を位置付けることができているため、ここで何か論点と言うべきものを指摘することは避けたいと思います。

余談ですが、今年、辻村深月さん原作の映画『かがみの孤城』を会員のひとりと観に行きました。様々な悩みを抱える10代の子どもたちを描いた本作を踏まえて、ドラえもんを愛する辻村さんが『凍りのくじら』を執筆したことの意味をもう少し考える必要があるかもしれません。

『ドラえもん』という枠に乗りながら、人間の生きづらさをいかに語るができるのでしょうか？

これ描いて死ね

なかなか刺激的なタイトルですが、本作を読めば、それが令和時代の『まんが道』であることがすぐにわかります。

高校生の主人公らが漫研を結成し、漫画制作に乗り出してゆく過程は、まさに『まんが道』で満賀と才野が辿った道を踏襲しています。しかし、本作は現代が舞台であり、主人公らはSNSで漫画を公開したり、コミティアに参加したりと、『まんが道』の時代には存在しなかった、現代のまんが道が描かれています。主人公らが共同で同人誌を制作する場面は、まさに『まんが道』の再現と言えますが、その発表の場は、当時はなかったコミティアです。

漫画を取り巻く状況は、『まんが道』の時代から半世紀が過ぎて、大きく変容しました。『これ描いて死ね』の主人公らが歩むまんが道は、かつて藤子不二雄先生が歩き、彼らによって整備され、拡張された道なのです。『まんが道』の時代において、商業作家になれなかった人間が漫画制作に関わり続けることは困難でしたが、現代は同人文化の発展により、商業以外の世界で漫画を描き続けることが可能になりました。

『まんが道』が、漫画に命をかけた人間の物語であるならば、「これ書いて死ね」は、そのタイトルに反して、漫画と心中しなかった人間の物語と捉えることができます。かつて、「これ描いて死ね」と言うべき情熱を漫画にささげた人間も、現在では別の道を歩み、他でもない主人公らも、商業作家になりたい、という明確な気持ちがあるわけではありません。楽しいから描く、それだけです。

本作は、実在の漫画家の名前が作中で言及されますが（藤田和日郎、諸星大二郎など）、なんと藤子不二雄^④先生が本人として登場するシーンがあります。これは、作者のとよ田みのるさんが実際に藤子不二雄^④先生にお

会いたときのことがモチーフになっているそうです。ちなみに、とよ田さんは2014年から2015年にかけて出版された『ドラえもん&藤子・F・不二雄公式ファンブック F ライフ』にて、トリビュート作品を寄稿しています。

本作では、まんがを描くという営みについて、様々な動機が提示されています。素朴な「楽しい」という感情から、憎しみに似た醜い感情まで、それがどんな感情であれ、人々を創作へと駆り立てます。本作は、漫画に限らず、何かを創作するという営みをまっすぐに捉えなおす、そんな作品であるように思います。

さて、駆け足で3作品を紹介しましたが、他にも藤子不二雄先生に影響を受けたクリエイターの作品として挙げたいものはたくさんあります。日々、膨大に世に出る漫画を読んでいると、ふと藤子不二雄作品のオマージュを見つけることがあります。『ドラえもん』のようによく知られたものから、『未来の思い出』のように随分とマニアックなものも少なくありません。そうした“藤子不二雄ネタ”を見つけるたびに、私はささやかな喜びに駆られます。

藤子不二雄両先生が亡き今、新たに「藤子不二雄作品」が生まれることはありません。しかし、「藤子不二雄に影響を受けた作品」は、藤子不二雄作品が出版され続ける限り、増え続けるでしょう。私は、同じ藤子不二雄ファンとして、藤子不二雄に魅せられた人間が藤子不二雄作品にどのような思いを照射しているのかを探り、そして彼ら彼女らが生み出す作品に、藤子不二雄のエッセンスを見出すのが、たまらなく楽しいのです。